

詩 編 通 読

7 月



(7 月 30 日)「詩編 85 : 1~8」

主よ、あなたは御自分の地をお望みになり ヤコブの捕われ人を連れ帰ってくださいました。

(詩編 85 編 2 節)

・「回復と平和のための祈り」：救いを求める共同体の祈りです。この詩はバビロン捕囚のあと、捕らわれた場所から帰還したイスラエルの人々が歌ったとされます。救いを待ち望むアドベントにふさわしいとも言えるでしょう。

・イスラエルの人々にとって、バビロン捕囚は悲しい出来事であると同時に、神さまからの罰としての意味を持っていました。ですからそこから元の場所に戻れるということは、神さまが自分たちを赦してくださったということの意味すると考えられます。

・しかし帰還後も、すべてが平和になったわけではありませんでした。これはわたしたちが救いを得た後も、同じように困難が訪れるのと同じことかもしれない。波はずっと変わらずに、わたしたちに向かい続けるのです。

(7 月 31 日)「詩編 85 : 9~14」

主は必ず良いものをお与えになり わたしたちの地は実りをもたらします。

(詩編 85 編 13 節)

・11 節に「正義と平和は口づけし」という言葉があります。平和という語は通常、戦争のない状態をいいます。しかし「主の平和」というとき、それは神さまが共にいてくださるという平安な状態をいいます。「シャローム」という語であらわすこともできます。

・わたしたちの世界では、正義は必ずしも平和を創り出してはいません。かえって正義を押し付けることによって、争いが生まれることも多くあります。それは正義が、自分の尺度による正しさになってしまっているからです。

・聖歌 211 番は、収穫感謝の歌です。その折り返しでは、このように歌います。「よきものみな 天より来ぬ 神のみ恵みを ほめたたえよ」。神さまがすべてを与えてくださる。その恵みにみんなで与ることが、「シャローム」なのかもしれません。

(7 月 1 日)「詩編 76 : 8~13」

神は裁きを行うために立ち上がり 地の貧しい人をすべて救われる。

(詩編 76 編 10 節)

・詩編にはしばしば、「神の勝利」を描く箇所が出てきます。詩編 76 編も、敵に対する決定的な勝利がテーマになっています。このような箇所を読むと、「キリスト教があるから戦争は終わらないんだ」と思ってしまいます。

・しかしここで大切なのは、神さまはどのようにそのような勝利を目指されるのかということです。10 節にこのようにあります。「地の貧しい人をすべて救われる」と。これこそがすべての目的であり、神さまはこのために働かれているのです。

・世界の為政者と呼ばれる人たちが皆この視点に立つことができると、きっと平和が訪れるのでしょう。「自分たち」や「一部の人」だけではなく、「すべての人」が救いの対象になっている。イエス様もそのことを、わたしたちに伝えられました。

(7月 2日)「詩編 77:1~10」

主の慈しみは永遠に失われたのであろうか。約束は代々に断たれてしまったのであろうか。

(詩編 77 編 9 節)

・「昔を回想して救いを求めるイスラエルの祈り」：救いを求める個人の祈りです。表題にあるエドトンというのは、ダビデの時代の有名な指揮者の名前です。彼の編曲に合わせて歌うということのようです。

・この詩の 8~10 節で、作者は叫びます。「主はどこしえに突き放し 再び喜び迎えてはくださらないのか。主の慈しみは永遠に失われたのであろうか。約束は代々に断たれてしまったのであろうか。神は憐れみを忘れ 怒って、同情を閉ざされたのであろうか。」

・祈っても祈っても満たされない現実、わたしたちにも訪れるものです。その中で作者は願うだけでなく、神さまのことを深く思います。思い続け、悩み、思い巡らしていく中で、彼の心には何が見えたのでしょうか。

(7月 3日)「詩編 77:11~16」

神よ、あなたの聖なる道を思えば あなたのようになされた神はあるでしょうか。

(詩編 77 編 14 節)

・昨日の箇所続きです。作者はどれだけ祈っても満たされない状況の中、神さまのことを深く思いめぐらしました。神さまの救いのみ手が変わってしまったのか、それとも自分が弱くされてしまったのか、その思いの中である出来事を思い起こします。

・それは、出エジプトの出来事です。イスラエルの人々にとってこの救いの御業は、何物にも代えられない恵みでした。その出来事があったからこそ、自分たちにも救いが与えられるのだと信じる事ができたのです。

・わたしたちは礼拝の中で、イエス様の降誕、生涯、十字架、復活という救いの御業を毎年想起していきます。それは過去の出来事を思い返すだけでなく、今もわたしたちに神さまのみ手が伸ばされているということを知るためなのです。

(7月 28日)「詩編 84:1~8」

あなたの祭壇に、鳥は住みかを作り つばめは巢をかけて、雛を置いています。万軍の主、わたしの王、わたしの神よ。

(詩編 84 編 4 節)

・「巡礼者の聖所へのあこがれ」：神殿を神の住まいとして喜び祝う歌です。ユダヤ教では成人男子は年三回の大きな祭りの際に、エルサレム神殿に巡礼をしなければならないという決まりがありました。

・しかし行きたくても行けないという人も多かったようで、「最低でも年一回は」とその縛りは緩められていったようです。ただ人々は嫌々行っていたかという、決してそういうことはありませんでした。

・神殿は神さまが臨在される場所として考えられており、そこに行くことは大きな喜びでした。ですからわたしたちが、「最低でも年二回は教会に来てください」というのとは大きく違います。教会も喜びのうちに、できる限り行くようにしましょうね。

(7月 29日)「詩編 84:9~13」

あなたの庭で過ごす一日は千日にまさる恵みです。主に逆らう者の天幕で長らえるよりは わたしの神の家の門口に立っているのを選びます。

(詩編 84 編 11 節)

・聖歌 392 番に、このような歌詞があります。「神の み住まいの 麗しさよ わたしの心は喜び舞い あなたの命を慕い歌う」。イスラエルの人々にとって、エルサレム神殿への巡礼は、とても大きな出来事でした。

・同じ歌の 4 節には、このようにあります。「あなたのみそばに 憩う一日 千日に優るこの喜び 寄り頼む人に幸いあれ」。神さまのみそばにいる一日は、千日以上価値があるということです。

・週に一度、たった数時間の教会の礼拝ですが、わたしたちはその時間を持つことで一週間の生きる活力を得ます。「千日」まではいなくても、教会に來たから恵みを得た、そう感じることでできる主日がいつも送れるといいですね。

(7月 26日)「詩編 83 : 6~13」

これらの民の貴族をオレブとゼエブのように 王侯らをゼバとツアルムナのようにしてください。
(詩編 83 編 12 節)

・7 節から 9 節に書かれているのは、アッシリアを除いてイスラエルに隣接していた民族です。日本は島国であるため、「隣国の脅威」ということには鈍感だと言われます。歩いて外国に行くことが出来るほうが、何だか羨ましいですが。

・旧約聖書には、イスラエルと隣国との争いが多く記載されています。10 節以降には、神さまが過去になさったことが書かれています。作者はその出来事を、今この時に実行して欲しいのだと訴えるのです。

・士師記 4~8 章には、そのような過去におこなわれたことが書かれています。その記述を見るたびに、「平和」っていったい何なのだろうかと思うことがあります。どの民族も救われる、それがイエス様の伝えて下さった新しい約束なのかもしれません。

(7月 27日)「詩編 83 : 14~19」

彼らが悟りますように あなたの御名は主 ただひとり 全地を超えて、いと高き神であることを。

(詩編 83 編 19 節)

・詩編の作者は、神さまの勝利を求めて訴えます。14~16 節には、とても恐ろしい破壊の様子が書かれます。「車の輪のように、風に巻かれる藁のように」という状況を想像すると、目が回ってしまいます。

・詩編においては、「神の勝利」=「敵の滅亡」なのだと思います。しかしこの考え方は、とても危険です。今でも多くの場所で、「自国の勝利」を目指して「敵を滅亡」させようとする「攻撃」がおこなわれているからです。

・ではこのような詩編をわたしたちは、どう捉えればよいのでしょうか。「彼らは主の御名を求めるようになるでしょう」という言葉が、少しだけ光明を与えているように思います。神さまが崇められることを願う、でもやっぱり争いはよくないと思います。

(7月 4日)「詩編 77 : 17~21」

あなたはモーセとアロンの手をとおして 羊の群れのように御自分の民を導かれました。
(詩編 77 編 21 節)

・嵐が好きな人は、あまりいないと思います。(タレントのグループ名ではありません。念のため)。大水や雷鳴、稲妻という言葉を知ると、わたしたちは恐ろしくなっておへそを隠してしまいます。

・「嵐の中にいる神さま」、旧約聖書の創世記を題材とした映画「天地創造」や「十戒」を見ると、そのようなイメージを持つてしまうのはわたしだけでしょか。神さまは嵐の中で、アブラハムやモーセに語りかけているようにも感じます。

・またイエス様も嵐の中で、「あなたがたの信仰はどこにあるのか (ルカ 8 : 25)」と問われます。わたしたちが嵐の中で恐れ、叫ぶときにも、神さまはその嵐を支配し、羊のような弱いわたしたちをオアシスへと導いてくださるのです。

(7月 5日)「詩編 78 : 1~4」

わたしは口を開いて箴言を いにしえからの言い伝えを告げよう

(詩編 78 編 2 節)

・「イスラエルの歴史における神秘」：歴史の詩です。これは教師の発言のようなもので、全体が一つのスピーチのようになっています。2 節にある「箴言」や「いにしえからの言い伝え」とは、創世記からサムエル記にあるイスラエルの定礎物語です。

・旧約聖書はそれらの書物の中で、アブラハムから始まり、ダビデの物語などを伝えます。そして同時に、イスラエルの人々と共に歩まれた神さまの歩みを語っていくのです。それを読むことで、自分たちのアイデンティティを確かめていきました。

・そしてその恵みを、「子孫に隠さず、後の世代に語り継ごう」と促します。わたしたちは神さまの恵みを、子孫（家族）に隠してはいないでしょうか。「伝える」ということは、とても大切なことなのです。

(7月 6日)「詩編 78 : 5~8」

子らが生まれ、後の世代が興るとき 彼らもそれを知り その子らに語り継がなければならない。

(詩編 78 編 6 節)

・ここではなぜ、子や子孫に神さまの恵みを伝えなければならないかが語られています。それは、「先祖のように頑な反抗の世代とならない」ためです。いわゆる「反面教師」ということでしょうか。

・イスラエルの人たちは、「信仰の継承」を何よりも大切にしていました。日本の神道や仏教でも、お墓や仏壇を大切にしてきたと思います。またキリスト教の中で、「わたしは～代目のクリスチャン」という会話が聞かれることもあります。

・カトリック教会や聖公会は、「家の宗教」に近いように思います。それに對して多くのプロテスタント教会は、「個人の信仰」に重きが置かれているようです。ただどちらにしても、信仰の継承はとても大切なことです。

(7月 7日)「詩編 78 : 9~11」

彼らは神との契約を守らず その教えに従って歩むことを拒み

(詩編 78 編 10 節)

・詩編 78 編は、72 節までである大変長い詩編です。その中でも今日の 11 節までが、序文となっています。この詩編は、教師による「歴史の詩」という側面があるということ、最初のところで説明しました。

・教える人は、この詩編がどのようなもので、またどのような目的で書かれているかを序文の中で語ります。彼がイスラエルの人々に伝えたいのは、「同じ過ちを繰り返すな」ということです。

・彼らは、神さまとの契約を守りませんでした。その様子は、出エジプト記にも多く書かれています。これ以降の箇所でもその過ちを振り返り、同じ轍を踏まないようにと願うのです。ただそれを聞かされても、なかなか完全な人間にはなれないのも事実です。

(7月 24日)「詩編 82 編」

神よ、立ち上がり、地を裁いてください。あなたはすべての民を嗣業とされるでしょう。

(詩編 82 編 8 節)

・「不正な裁判官に対する裁き」：裁判官を責める歌です。福音書には「やめと裁判官 (ルカ 18 : 1~8)」という話が載せられていますが、公正な裁きをおこなう裁判官はどれくらいいたのでしょうか。

・弱者や孤児、苦しむ人や乏しい人、弱い人や貧しい人、裁判官にはそのような人たちの側に立ってほしいと、神さまは望みます。しかし生活のためや立場的なことで、「長いものにまかれる」こともあるのかもしれません。

・わたしたちはいつも、弱い人たちの側に立っているのでしょうか。ただ難しいのは、「わたしは弱いだから、わたしの側に立て！」と大声で叫ぶ「強い人」もいるということです。なかなか簡単に、自分の立ち位置を決めるのも難しいものです。

(7月 25日)「詩編 83 : 1~5」

神よ、沈黙しないでください。黙していないでください。静まっていないでください。

(詩編 83 編 2 節)

・「敵に囲まれたイスラエルの祈り」：救いを求める共同体の祈りです。彼らは神さまに対して、「沈黙しないでください、黙していないでください、静まっていないでください」と願い続けます。

・イスラエルの人々は何度も、他国の脅威に悩まされたことがありました。旧約聖書にはバビロン捕囚という出来事が書かれています。またナチス・ドイツによるホロコーストによって、たくさんのユダヤ人が犠牲になっていきました。

・「神の民」という「名」が、絶たれようとしたのです。その状況を、作者は神さまに何とか聞いてほしいと願うのです。自分たちの危機に神さまが介入されることを、彼らは望んでいるのです。

(7月 22日)「詩編 81 : 1～8」

わたしたちの力の神に向かって喜び歌い ヤコブの神に向かって喜びの叫びをあげよ。

(詩編 81 編 2 節)

- ・「祭りの時の主の戒め」：神への賛美です。この詩編はユダヤ教の三大祭の一つ、仮庵の祭りのときに用いられたと思われます。表題にある「ギティト」は、ぶどう搾り用の酒舟のことです。
- ・「力の主を ほめたたえまつれ」という聖歌があります (316 番)。聖歌の中では「豎琴 かき鳴らしつつ」とありますが、詩編の中では「太鼓」、「琴」、「豎琴」、「角笛」という楽器が登場します。
- ・音楽を用いて神さまを賛美することは、今もおこなわれています。喜びをそのような形で表現することを、神さまは命じられていたのです。わたしたちも礼拝の中で、喜びをにぎやかに表現すること、たまには必要ですね。

(7月 23日)「詩編 81 : 9～17」

主は民を最良の小麦で養ってくださる。「わたしは岩から蜜を滴らせて あなたを飽かせるであらう。」

(詩編 81 編 17 節)

- ・詩編 81 編には 7 節から 15 節までに、説教が組み込まれています。この中で作者は、神さまがイスラエルとの間に立てられた関係について回顧しています。9 節には「イスラエルよ、わたしに聞き従え」という言葉があります。
- ・しかしイスラエルの人々は、その声に聞かず、神さまを求めることもありませんでした。彼らは神さまに背きました。そしてイスラエルの不信仰によって何が起こったのか、そのことを書いていくのです。
- ・しかしその中においても、神さまは人々に収穫を与えてくださいます。この詩は仮庵の祭りで歌われていました。イスラエルの背信にもかかわらず、彼らを守り、豊かな糧を与えてくださる恵みに感謝しているのです。

(7月 8日)「詩編 78 : 12～16」

荒れ野では岩を開き 深淵のように豊かな水を飲ませてくださった。

(詩編 78 編 15 節)

- ・今日の箇所から 39 節まで、荒れ野での出来事が語られていきます。出エジプト記を読むとわかるように、イスラエルの人々は何度も何度も神さまのみ心を理解せず、間違いを繰り返してしまいました。
- ・今日の箇所に書かれていることは、イスラエルの人々がエジプトから逃げる際に、神さまが葦の海をせき止め、イスラエルの人々を渡らせた出来事です。神さまはイスラエルの人々が渡り終わった後に水を戻し、エジプト軍を水の底に沈めてしまいました。
- ・また荒れ野で昼は雲の柱、夜は火の柱をもって導かれたことも、全能の神さまのみ業として描かれます。しかし岩を開き水を飲ませられた出来事は、イスラエルの人たちの不平に対して神さまがなさったことです。先祖の過ちも、しっかり語られているのです。

(7月 9日)「詩編 78 : 17～22」

神に対してつぶやいて言った。「荒れ野で食卓を整えることが 神にできるのだろうか。」

(詩編 78 編 19 節)

- ・出エジプト記 15 章 22 節から 17 章 7 節には、「マラの苦い水」、「マナ」、「岩からほとばしる水」という物語が載せられています。これらの物語の舞台は、荒れ野です。イスラエルの人々はエジプトを出た後、荒れ野をさまよっていました。
- ・うろろうするのが数日間だったり、「いつまで」という期間がわかっていたのなら、まだ我慢ができたかもしれません。しかしいつになったら出られるかもわからない状況で水も食料もなければ、不安になる気持ちもわかります。
- ・イスラエルの人々は、つぶやきました。このつぶやきが、神さまへの反逆と捉えられてしまいます。「つぶやくくらいで」と思うかもしれません。しかしつぶやくことは、神さまに信頼を置けないことを意味しているのです。

(7月 10日)「詩編 78:23~31」

彼らは食べて飽き足りた。神は彼らの欲望を満たしてくださった。

(詩編 78 編 29 節)

- ・神さまは人々のつぶやきを聞き、マナやうずらを与えます。しかし同時に神さまは怒り、イスラエルの人々に罰を与えます。それは彼らが神さまの言いつけを守らず、ダメだという日にマナを見つけに行ったりしたからです。
- ・「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ (コリントの信徒への手紙二 12 章 9 節)」というパウロの言葉があります。しかしわたしたちは時に、もっとくれ、もっとくれと要求してしまうのです。
- ・神さまはわたしたちに、必要な恵みを与えて下さっています。わたしたちはその恵みに、飽き足りているでしょうか。欲望から離れることができずにいると、神さまは悲しまれることでしょう。

(7月 11日)「詩編 78:32~39」

しかし、神は憐れみ深く、罪を贖われる。彼らを滅ぼすことなく、繰り返し怒りを静め 憤りを尽くされることはなかった。

(詩編 78 編 38 節)

- ・詩編 78 編ではしつこいくらいに、荒れ野で犯してきたイスラエルの人々の罪が語られます。その罪の故に神さまは、人々の生涯をひと息のうちに、そしてその年月を恐怖のうちに断とうとされます。とても恐ろしい記述です。
- ・しかしイスラエルの人々は、何度も神さまを求め、また立ち帰って神さまを捜し求めてきました。しかし同じように何度も、神さまを侮り欺くのです。悔い改めと背信を繰り返すその姿は、わたし自身を見ているようです。
- ・神さまはその人間の弱さを、御心に留められました。人間は肉に過ぎない、その言葉が意味するのは、人間は完全に正しくはありえないということです。罪に苦しみもがくわたしたちを、神さまは憐れんでくださるのです。

(7月 20日)「詩編 80:9~14」

あなたはぶどうの木をエジプトから移し 多くの民を追い出して、これを植えられました。

(詩編 80 編 9 節)

- ・イスラエルの人々は、しばしばぶどうの木にたとえられます。9~10 節に書かれている「ぶどうの木をエジプトから移し...これを植えられました。...場所を整え、根付かせ、この木は地に広がりました」というのは、イスラエルの歴史を振り返る記述です。
- ・ぶどうの木については、エレミヤ書、ホセア書、エゼキエル書でも触れられています。乾燥地帯であるユダヤ地方ではぶどうはよく栽培されていました。そのために生活の中でなじみ深く、聖書やイエス様の話にも度々登場します。
- ・ただそのぶどう畑が荒らされているというのです。森の猪や野の獣によって荒らされているという描写は、ユダヤの地が敵の攻撃を受け、荒廃していることを示します。神さまによって植えられたはずなのになぜですか。その嘆きが歌われているのです。

(7月 21日)「詩編 80:15~20」

わたしたちはあなたを離れません。命を得させ、御名を呼ばせてください。

(詩編 80 編 19 節)

- ・15~18 節には、作者の願いが綴られています。わたしたちが祈るときに、自分の思いだけが続くことがあります。その祈りの前後に神さまへの賛美や他者のための祈りがあればいいのですが、自分の思いだけが前に出てしまうと、それはどうかな? となってしまう。
- ・イスラエルの人々は、神さまはその右のみ手で自分たちをぶどうの木として植えられたと信じていました。そのぶどうの木を、どうか顧みてくださいと願うのです。そしてその願いだけではなく、自分たちの信仰を神さまに誓うのです。
- ・19 節の言葉、「わたしたちはあなたを離れません。命を得させ、御名を呼ばせてください」とは、自分たちはどこに立つのかという表明です。そして 20 節には、4 節と 8 節にも書かれた言葉が繰り返されます。「わたしたちをお救いください」、それが共同体の祈りなのです。

(7月 18日)「詩編 79 : 10～13」

どうして異国の民に言わせてよいでしょうか 「彼らの神はどこにいる」と。
あなたの僕らの注ぎ出された血に対する報復を 異国の民の中で、わたした
ちが 目の前に見ることができますように。

(詩編 79 編 10 節)

・10 節の、「どうして異国の民に言わせてよいでしょうか、『彼らの神はどこ
にいる』と」という言葉が、この詩の主題となります。敵対する異国の民は、
イスラエルの人々を嘲笑います。

・イスラエルの人々は、「報復を見ることができますように」、「嘆きが御前に
届きますように」、「彼らの辱めを七倍にして返してください」という三つの
願いを歌います。彼らは共同体として、その苦難を心に留めていくのです。

・イスラエルの人々は自らを、「あなた（神さま）の民」、「あなた（神さま）
に養われる羊の群れ」と語ります。神さまとの関係を語り告げながら、彼ら
は「とこしえに」、「世々に」、神さまを賛美し続けるのです。

(7月 19日)「詩編 80 : 1～8」

万軍の神、主よ、あなたの民は折っています。いつまで怒りの煙をはき続け
られるのですか。

(詩編 80 編 5 節)

・「荒らされたあなたのぶどう園を元どおりに」：共同体の祈りです。2 節に
書かれているケルビムは、神の箱につけられたものです。イスラエルの人々
はその箱によって、羊のように導かれてきました。

・しかし彼らイスラエルの人々は、北からも南からも責められていきます。
この詩編の記述は、紀元前 722 年に起こった北イスラエル王国の滅亡やアッ
シリア軍の侵入を思い起こしているようです。

・作者は嘆きの中で、辱めを受けていきます。けれどもその中においても、
神さまに願い続けるのです。4 節と 8 節には同じ言葉が書かれます。「万軍の
神よ、わたしたちを連れ帰り 御顔の光を輝かせ わたしたちをお救いくだ
さい」。願い続けることが大切なのです。

(7月 12日)「詩編 78 : 40～42」

どれほど彼らは荒れ野で神に反抗し 砂漠で御心を痛めたことか。

(詩編 78 編 40 節)

・荒れ野でのイスラエルの人々のおこないを振り返ったときに、人々は心を
痛めます。「昔の人がやったこと」ではなく、自分たちもいつ同じようになる
のかわからない現実を知り、嘆くのです。

・今年は戦後 80 年の節目の年です。実際に戦地に行って戦った方は、少なく
なってきました。わたしを含め、いわゆる「戦後生まれ」の世代にとって、
戦争は過去の出来事という思いも抱いてしまいます。

・しかしわたしたちは、過去の出来事にも向き合わなければなりません。そ
れは自分たちもまた、同じ過ちを犯す可能性があるからです。肉にすぎない
わたしたちは、過去に学ぶ必要があるのです。

(7月 13日)「詩編 78 : 43～51」

神は燃える怒りと憤りを 激しい怒りと苦しみを 災いの使いとして彼らの
中に送られた。

(詩編 78 編 49 節)

・今日の箇所には、出エジプトの際の「10 の災い」が書かれています。10 の
災いとは、①ナイル川の水を血に変える、②蛙を放つ、③ぶよを放つ、④あ
ぶを放つ、⑤家畜に疫病を流行らせる、⑥腫れ物を生じさせる、⑦雹を降ら
せる。

・⑧いなごを放つ、⑨暗闇でエジプトを覆う、⑩長子を皆殺しにするという
出エジプト記 7 章 14 節～12 章 33 節に書かれた出来事です。昔この順番を
すべて覚えさせられましたが、何の意味があったのでしょうか。

・これらの奇跡を、イスラエルの人々はずっと語り継いできました。神さま
が自分たちに手を伸ばされ、救いの道を示されたこれらの出来事は、イスラ
エルの人々を支え続けてきた大きな神さまの恵みだったのです。

(7月 14日)「詩編 78 : 52～55」

彼らの前から諸国の民を追い払い 彼らの嗣業を測り縄で定め イスラエルの諸部族を それぞれの天幕に住まわせられた。

(詩編 78 編 55 節)

・エジプトで 10 の災いによって神さまから導かれたイスラエルの人々は、その後、荒れ野を放浪します。その期間は 40 年にも及んだそうです。その様子をここでは「羊のように」、「家畜の群れのように」と表現します。

・聖書には神さまと人間との関係を、羊飼いと羊として描いている箇所があります。ユダヤには羊が多くおり、家畜として育てられていました。その羊は弱い動物で、野獣や強盗などの敵も多かったようです。

・また目も悪く、自分の力だけではなかなかオアシスなどの目的地にたどり着けません。そこで羊飼いの力が必要になるのです。神さまは迷い、倒れそうになる人々を導かれました。そしてわたしたちをも導いておられる。聖書はそのことを伝えているのです。

(7月 15日)「詩編 78 : 56～64」

異教の祭壇に仕えて神を怒らせ 偶像を拜んで神の激情を引き起こした。

(詩編 78 編 58 節)

・「約束の地」に導かれた後も、イスラエルの人々は何度も神さまを試み、反抗し、そのみ定めを守らなかったようです。そのような先祖の姿をいつも思い起こすように、この詩編は語り継がれているのでしょう。

・旧約聖書を読むときに、「怒る神さま」の姿が心に強く残ってしまうことがあります。確かに人間が悪いのですが、火を放ったり疫病を広めたり、もう少し辛抱してくれてもいいのにとすることもあります。

・聖書が伝えたいのは、それほどの恐ろしい経験をしていても、人間は正しくなれなかったという事実です。そしてそのような弱いわたしたちを救うために、「新しい契約」を神さまが示されたということです。そのために、イエス様は来られたのです。

(7月 16日)「詩編 78 : 65～72」

乳を飲ませている羊の後ろから取って 御自分の民ヤコブを 御自分の嗣業 イスラエルを養う者とされた。

(詩編 78 編 71 節)

・今日で詩編 78 編は終わります。神さまはダビデを選び、イスラエルを導く者として立てられました。彼は偉大な王としてその名を残しますが、聖書には彼が犯した罪も隠さずに書かれています。

・神さまはダビデに、神殿を建てることを許しませんでした。神殿は神さまの定めにより、ダビデの子ソロモンが建てることになります。つまり神殿の建築は、あくまでも神さまの意思なのです。

・このように神さまの思いが人々の間にあり、そしてその象徴として神殿が造られていきました。建物である神殿はその後崩壊しましたが、人々の心に建てられた神殿は、いつまでも崩れることはないのです。

(7月 17日)「詩編 79 : 1～9」

主よ、いつまで続くのでしょうか。あなたは永久に憤っておられるのでしょうか。あなたの激情は火と燃え続けるのでしょうか。

(詩編 79 編 5 節)

・「エルサレムと神殿の破壊」：主の民の祈りです。ここに書かれている出来事は、紀元前 587 年に起こったバビロニアによるエルサレム陥落だと考えられています。この出来事は、旧約聖書の列王記下 25 章に書かれています。

・イスラエルの人々が大切にしていたエルサレム神殿が、異国の民によって汚されました。エルサレムは荒廃し、その地は荒らされ、そして人々は虐殺されていきます。イスラエルの人々は、弱さと恥辱の中に生きていくことになります。

・彼らはこの状況を、「神さまの怒り」によるものだと考えます。自分たちの罪のせいで、こうなったのだということです。そしてその怒りを、自分たちの敵に転じて欲しいと願うのです。頭の上の炭を隣の人の頭に置き替えてください、ということでしょうか。